事例―01

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人善隣福祉会　東玉川善隣保育園（東京都世田谷区）

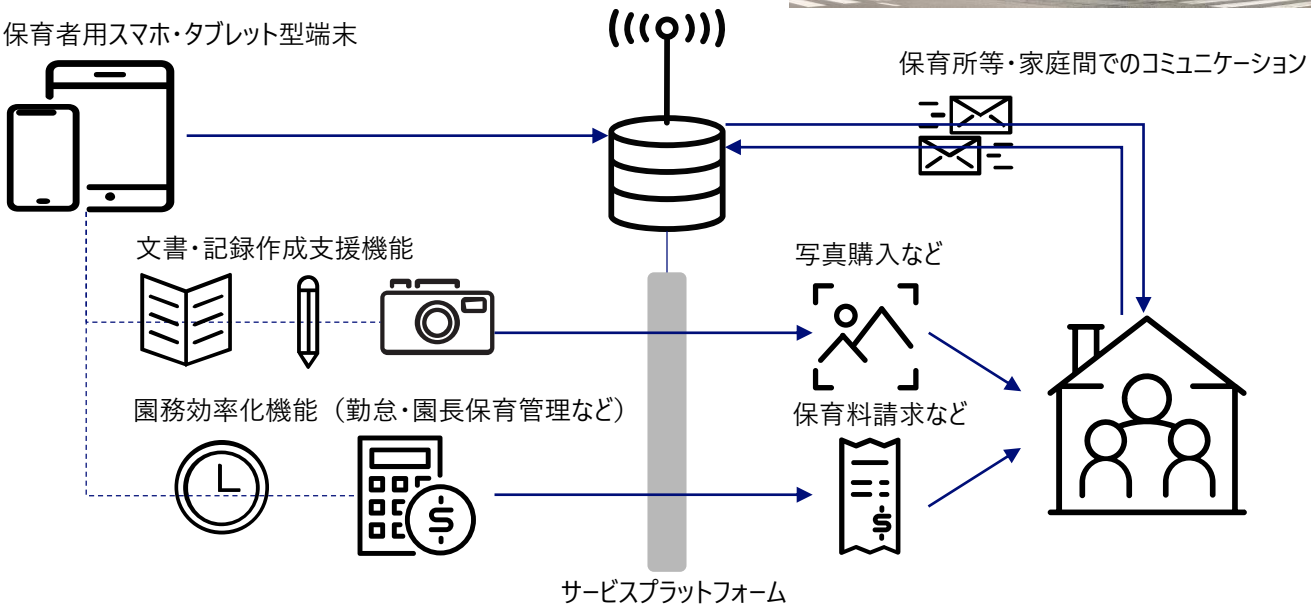
取組内容

ICTツールを活用した文書作成業務の省力化

- ✓ ICTツールを用いた計画や記録、連絡帳等の文書作成
- ✓ 計画や記録のICTツール上での共有

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	14人（2クラス）
実証参加保育者	12人
園長・副園長	1人
主任保育士等	1人
現場保育士	10人



業務フローの変化

困っていたこと（取組の理由）

事務負担が多く、子どもに向き合う時間を十分に確保できなかった

- ◆ 手書きで記載する計画や記録、連絡帳といった文書が多く、記入に時間がかかっていた。
- ◆ 紙媒体で保管する必要があり、整理が必要だった。

課題解決のプロセス（手順）

文書作成業務の効率化のために、ICTツールとタブレット型端末を導入した。さらに、チェック業務や作成した文書の保管・共有もツール上で行い、印刷や整理の手間をなくした。

1 運営方針の説明
就職を希望する保育士に対して、ICTツールの活用を保育園の方針として面接時から説明する。

2 ICTツールの検討
園の目的に合わせて導入するICTツールやその機能を選択する。

3 ICTツール・機器の準備
サービスプロバイダーや端末手配の専門業者に依頼し、園内の環境設定やツールの準備を行う。

4 職員向けICTツール・タブレット型端末の使い方講習
オフィス機器業者やサービスプロバイダーに依頼して、ツールの使い方についてオンライン研修を行う。

5 ICTツールの導入
各機能の使い勝手や現状業務との整合性を確認しながら、ツールの導入を進める。

取組時のポイント・工夫

- 新設の保育園で、開園時からICTの活用を方針として掲げており、職員の採用の際にも伝えるようにした。
- 導入前に各ツールを試用し、現場で使いやすいツールを検討し、一部の機能では別のツールも併用することにした。
- 園の管理者では端末の準備に不安があったため、オフィス機器業者に調達を委託した。
- 導入前後で、ツールの使い方だけでなく、タブレット型端末そのものの使い方についても講習を依頼した。
- サービスプロバイダーや機器業者からツール導入の効果を説明してもらうことで、わかりやすく説得力も高まった。

質的な成果

- ✓ 園内外問わず連絡がスムーズになった。
- ✓ 隙間時間で文書作成業務を行えるようになった。
- ✓ ICTツール上にすべき業務が表示されるため作業漏れを防ぐことができた。
- ✓ オンラインによる園公開など、タブレット型端末をICTツール以外にも活用できた。

量的な成果

- ✓ 日誌や連絡事項の省力化で4割程度の業務時間削減効果があった。
- ✓ 紙への記入のため職員用机やPCが不要となり、保育スペースを広くとれた。

取組上の留意点

- ✓ 計画や記録を作成する際の代理入力や、出退勤データの改ざんを防止するため、パスワードや端末を適切な管理を行う必要がある。
- ✓ 管理者が保育士の作成した計画・記録を承認する前に、確認を怠らないようにする必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：特になし。
- □ モノ：サービス利用料（27,500円/月）・タブレット型端末（38,000円/台×21台）・オフィス機器業者による講師料（5~6万円）

事例―02

0～1歳児
2歳児
3～5歳児

園務効率化
児童の安全確保
公衆衛生向上
保育者のスキル向上
ICT
IoT
その他

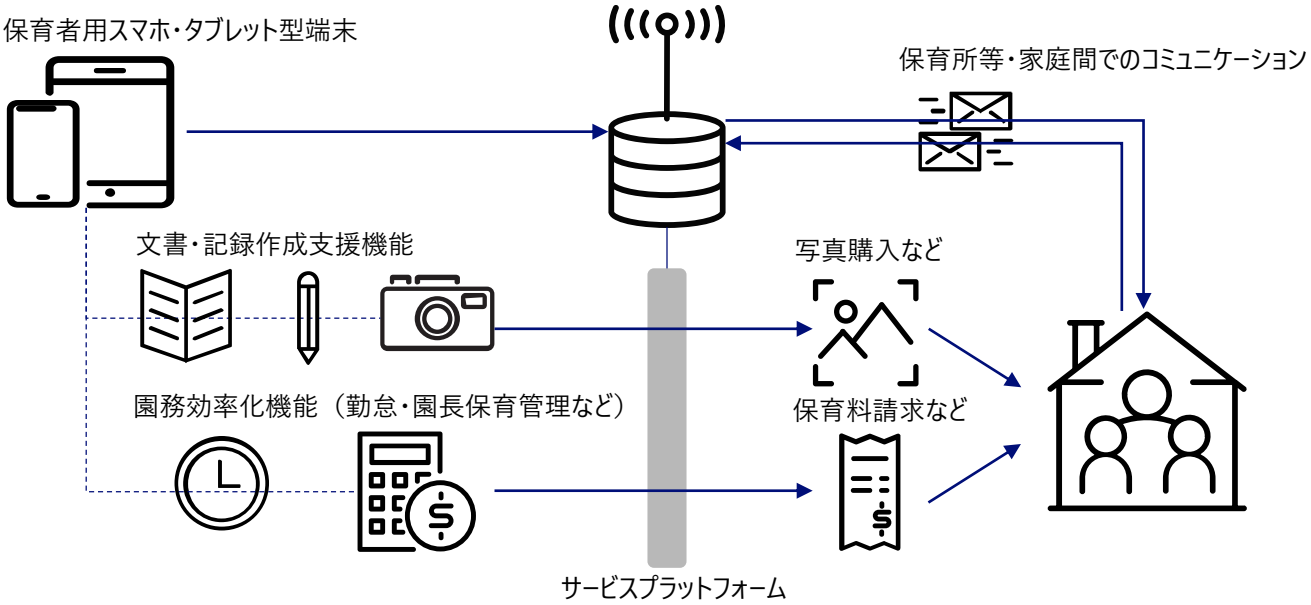
事業所名　社会福祉法人仁岳会　梅の実保育園（静岡県三島市）

取組内容

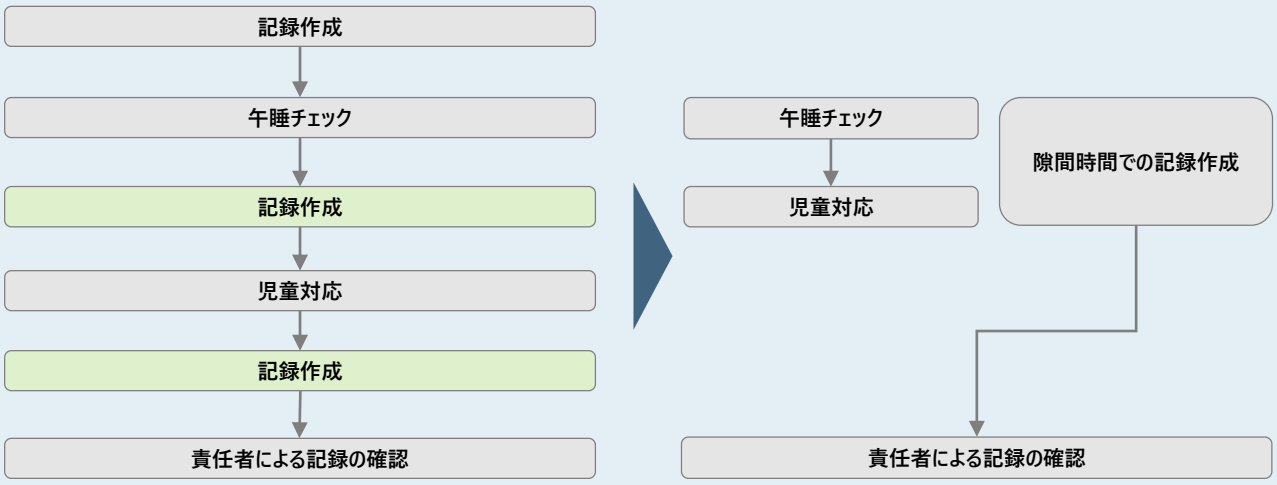
ICTツールを活用した文書作成業務の省力化
- ✓ ICTツールを用いた計画や記録、連絡帳等の文書作成
- ✓ 計画や記録のICTツール上での共有

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	145人（6クラス）
実証参加保育者	22人
園長・副園長	1人
主任保育士等	1人
現場保育士	20人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

過多な業務量により、残業時間が発生していた

- 手書きで記載する計画や記録、連絡帳といった文書が多く、記入に時間がかかっていた。
- 紙媒体で保管する必要があり、整理が必要だった。

課題解決のプロセス（手順）

文書作成業務の効率化のために、ICTツールとタブレット型端末を導入した。さらに、チェック業務や作成した文書の保管・共有もツール上で行い、印刷や整理の手間をなくした。

1 業務量調査
取組前の保育士の業務量を調査し、時間内に終わらないほどの業務量になっていることや、特に時間がかかっている業務が何かを明らかにする。

2 対応策の検討
若手の管理者が中心となり、主任保育士などを巻き込んで、特定された課題に対する対応策を検討し、ICTツールとタブレット型端末の導入を決定。

3 導入ツールの説明
現場保育士に対して、導入するICTツールの機能と、その効果を説明する。

4 ツールの段階的な導入
保育士や保護者からの理解が得やすい業務から段階的にICTツールを導入する。（本事例では、既に一部ICT化されていた登降園管理から導入した。）

5 業務削減効果の検証
取組前後の業務時間を比較し、業務削減効果を検証する。

取組時のポイント・工夫

- 業務量の可視化を行い、ICTツール導入の必要性を、ベテラン保育士や園長にも理解してもらった 。
- ICTツール導入の検討時に、どの業務から導入すべきかについても併せて検討した。
- 保育士や子どもにとってのメリットを合わせて説明した。また、新しい機能を導入する度に説明を行った。
- 効果が見えやすく、保育士の業務に影響が少ないものから導入した。また、段階的に導入することで、次第にICTツールの使い方に慣れてもらった。
- 職員同士の関係性やクラス配置など、ICTツールが苦手な職員が、得意な職員に聞きやすい環境が重要だった。

質的な成果

- ✓ 園内の情報共有がスムーズになり、情報共有漏れによる事故を防止できた。
- ✓ 他の保育士の計画や記録の書き方を参考にすることで、若手保育士の育成につながった。
- ✓ 連絡帳やアンケートの電子化により、保護者とのコミュニケーションが活発になった。

量的な成果

- ✓ タブレット型端末で入力し、ICTツール上で保管・共有することで、手書きで記載して印刷した時に比べて、1クラスあたり平均1.3時間/月の業務時間の削減効果があった。
- ✓ 印刷が不要になったことで、紙代と印刷代を合わせて約30万円/年程度の支出が削減された。

取組上の留意点

- ✓ 保育士の年齢や個人のITリテラシーによって、ICTツールを活用した際の業務削減効果が異なるため、個々の職員の習熟度に合わせた取組が求められる。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：特になし。
- モノ：ICTツールのサービス利用料・施設のネットワーク環境・PCやタブレット型端末

事例―03

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　ウェアラブルIoT　その他

事業所名　社会福祉法人幸倫会　陽西保育園（栃木県宇都宮市）

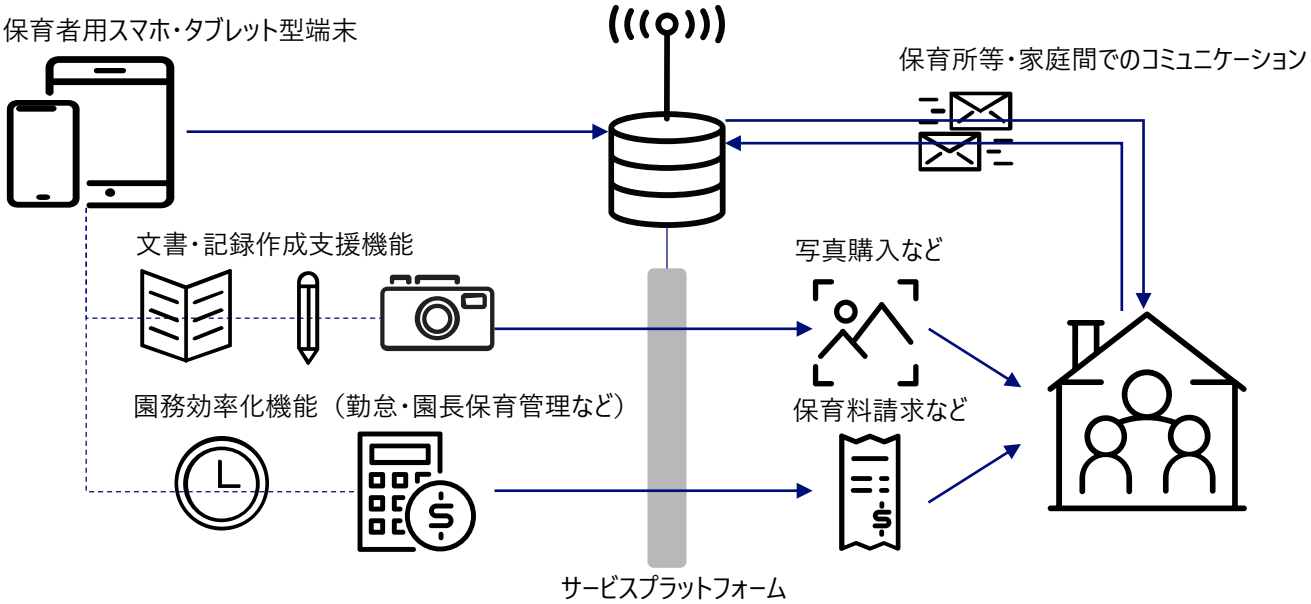
取組内容

ICTツールを活用した文書作成業務の省力化

- ✓ ICTツールを用いた計画や記録、連絡帳等の文書作成
- ✓ 計画や記録のICTツール上での共有

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	136人（6クラス）
実証参加保育者	28人
園長・副園長	2人
主任保育士等	2人
現場保育士	24人



業務フローの変化

困っていたこと（取組の理由）

事務負担を軽減するとともに、園内の保育の質の向上を図る必要があった

- 写真販売や請求管理・集金管理などは、職員が行う作業と事務所で行う作業のどちらも大変だった。
- 欠席連絡を電話でしか受けられず、保育士・保護者双方の負担が大きかった。
- 保育の考え方や保育の質の向上を職員に意識してもらえるツールを模索していた。

課題解決のプロセス（手順）

文書作成業務の効率化のために、ICTツールとタブレット型端末を導入した。ドキュメンテーションにもICTツールを活用することで、保育の質の向上に資する研修や保育実践に活用している。

1 ICTツールの導入検討
請求管理・集金管理、写真販売などバックオフィス業務の省力化ににつながるツールを中心に検討する。

2 保育の質に関する園内外研修
ICTツール導入前に保育の質に関するセミナーへの参加や、園内研修の実施を通じて、保育に対する理解を深める。

3 導入ツールの決定
既存ツールとの互換性や導入ハードルの低さといった観点から導入ツールを決定する。

4 ツールの段階的な導入
現在の業務の置き換えや省力化につながる領域から段階的に導入する。

5 ドキュメンテーションの導入
ICTツールの利用にある程度慣れてきたタイミングで、保育の質の向上に資するドキュメンテーション機能を導入する。

取組時のポイント・工夫

- 検討初期は、保育の質にかかわらないバックオフィス業務の省力化から検討を始めることで、抵抗感なく進められた。
- 導入前に保育についての理解を深めることで、ICTツールを適切に利用する風土を園内で醸成できた。
- 保育士や保護者の利便性から、既存ツールとの互換性がポイントとなった。また、今後のサービス拡充の可能性も考慮した。
- ITについて若手からベテラン職員に教えることが多く、普段とは逆転した関係になったことから、職場の調和も図られた。
- ICTツールでドキュメンテーションを行うことで、保育士同士の気づきの共有ができた。
- 保育の考え方の共有のため、園内研修や職員会議も行った。

質的な成果

- ✓ 保育士から手離れした業務も多く、園全体でマンパワーでこなしてきた業務から解放された。
- ✓ 当初、保護者とのコミュニケーションが減ることを懸念していたが、むしろ増加した。
- ✓ 保育士・児童の家庭（遠方の親族）でのコミュニケーション活性化や子育て支援につながった。

量的な成果

- ✓ 具体的な計測には至っていないが、保育士１人あたりで年間60時間ほどの時間捻出につながっていると考えられる。
- ✓ 研修に充てられる時間の確保と、ICTツールによる情報共有で若手保育士の早期育成につながっている

取組上の留意点

- □ ドキュメンテーションの形も保育士によってさまざまである。時間的・技術的余裕により仕上がりもことなるので、研修はじっくりと重ねていく必要がある。
- □ ドキュメンテーションの為の写真撮影が目的とならないよう、あくまで手段であり、表現力・伝達力を高めるために、何に気づき、何を観察すべきか、早い段階で保育士に理解してもらう必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：ICTを活用できない層へのフォローを要する。サービスプロバイダーによる研修の積極的な利用と保育士間での教え合いなど、全体が使えるようになるには2，3か月を要する
- □ モノ：ICTツールのサービス利用料（約3万円/年）・施設のネットワーク環境・PCやタブレット型端末

事例―04

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人ユーカリ福祉会　市川保育園（千葉県市川市）

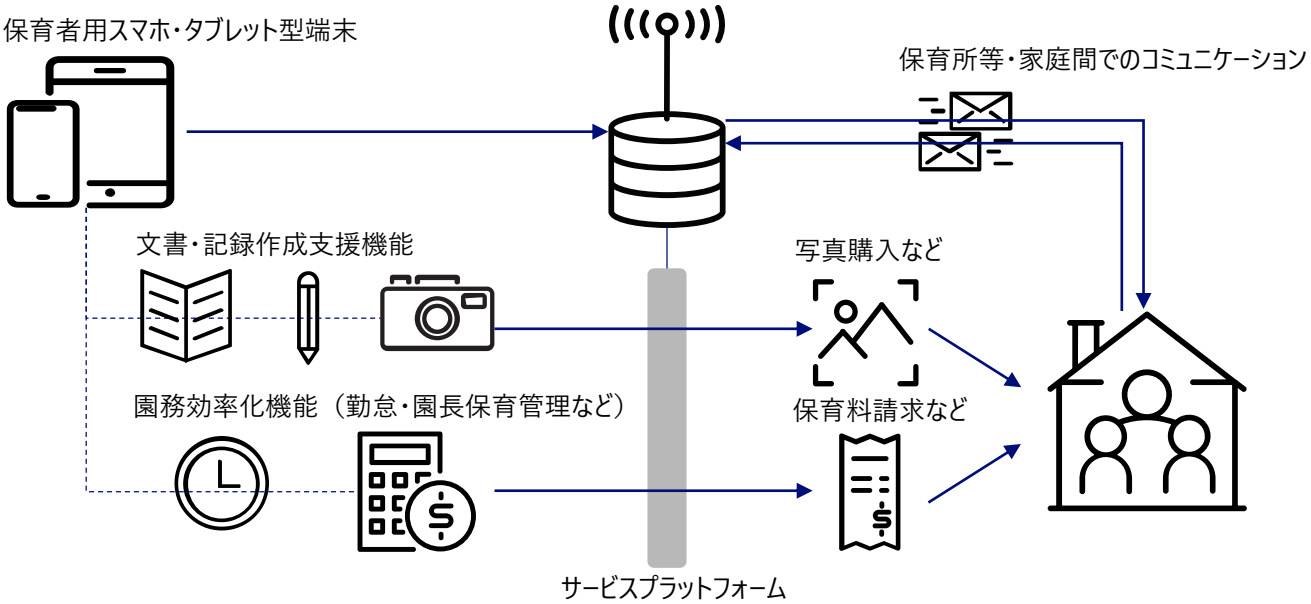
取組内容

ICTツールを活用した業務負担の軽減

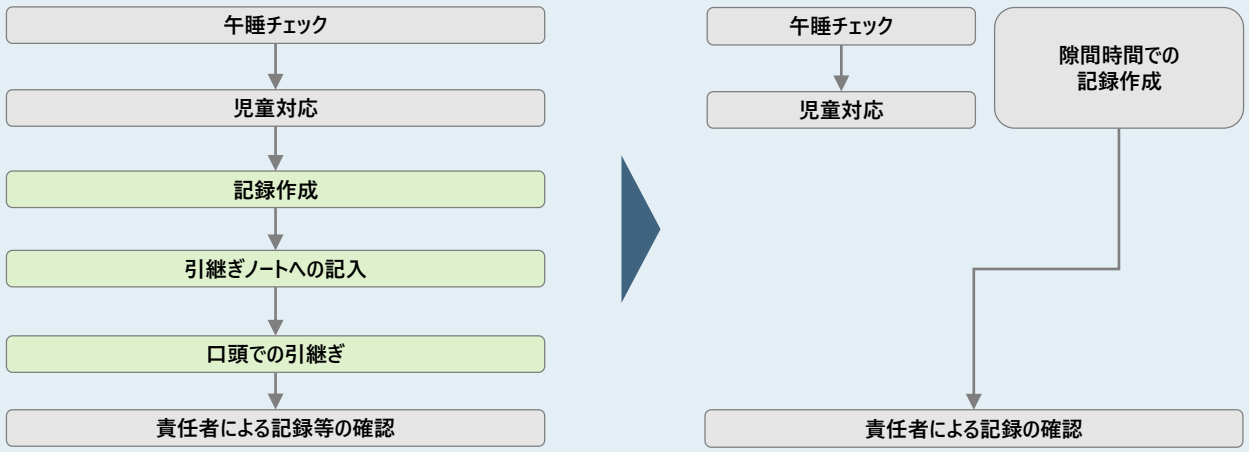
- ✓ 記録計画作成業務のデジタル化
- ✓ 保護者とのコミュニケーションのデジタル化

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	137人（6クラス）
実証参加保育者	31人
園長・副園長	1人
主任保育士等	2人
現場保育士	28人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

保育士不足を背景に、業務負担の高さによる保育士の離職が懸念されていた

- 業務負担を軽減し、働きやすい保育現場をつくる必要性を感じていた。
- 手書き業務が多く、保育士の業務負担が高かった。

課題解決のプロセス（手順）

タブレット型端末を用いて週案や月案、保育記録などの文書作成をICTツール上で行うとともに、園内や保護者とのコミュニケーションもツール上で行うようにした。

1 ICTツール導入の検討
園長など管理者を中心に、サービスプロバイダーを交えてICTツール導入を検討する。

2 職員向けの説明
職員向けにICTツールの必要性や使い方を説明する。

3 保護者向けの説明
保護者向けにICTツール導入の目的や、アプリの使い方について説明し、理解を得る。

4 ICTツールの導入
ITリテラシーが比較的高い職員から使用を開始する。

5 ICTツールの利用方法の共有
ICTツールの定着化に向けて、園内でICTツールの利用方法を共有する場を設置し、職員のITリテラシー向上を図る。

取組時のポイント・工夫

- ベテランの保育士が多く、ICTツールに対して抵抗を持つ方もいたため、まずはできる人から始めることを強調した。
- 導入初期は、保護者にタブレット型端末の業務利用を理解してもらうため、説明会に加え、端末にシールを貼るなど見え方にも気を遣った。
- 導入当初はスマートフォンを所持していない保護者もいたため、紙媒体と併用した。
- ICTツールの活用が苦手な職員に合わせて導入するようにした。
- 導入初期は、得意な職員が私用するようにして、苦手な職員には使い方を見ているだけでよいと伝えた。
- 職員が参加する「ICT委員会」を開催し、ICTツールの効果的な使い方や、困りごとの解消方法を紹介した。

質的な成果

- ✓ 保護者が保育中の様子を見られるようになった。
- ✓ 保育士がリラックスできる時間が生まれ、保育士の働きやすさが向上した。
- ✓ バックオフィス業務を削減して生まれた時間で、保育士同士で保育を振り返り、語り合う時間を持つことができた。

量的な成果

- ✓ 複数の文書に記載する手間がなくなり、ツール導入前に比べて、1時間/日程度は業務時間が削減できた。
- ✓ 空いた時間を子供と向き合う時間や、行事の準備・休憩時間などに充てることができた。また、研修や保育士同士の語り合いの時間も増加した。

取組上の留意点

- ✓ 保育士間の口頭でのコミュニケーションが減少してしまう恐れがある。隙間時間などで保育士間のコミュニケーションを活発化する工夫が求められる。
- ✓ タブレット型端末などを使用している間は子どもを見ていないのではないかと保護者が不安になることがある。保護者への丁寧な説明を通して、活用の意義を理解してもらうことが必要である。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：保護者への説明会の開催
- □ モノ：ICTツールの利用料：2万円/年・光回線（3回線）利用料
  携帯電話回線（7回線程度）利用料・初期費用（タブレット型端末、ノートPC）

事例―05

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人ユーカリ福祉会　市川保育園（千葉県市川市）

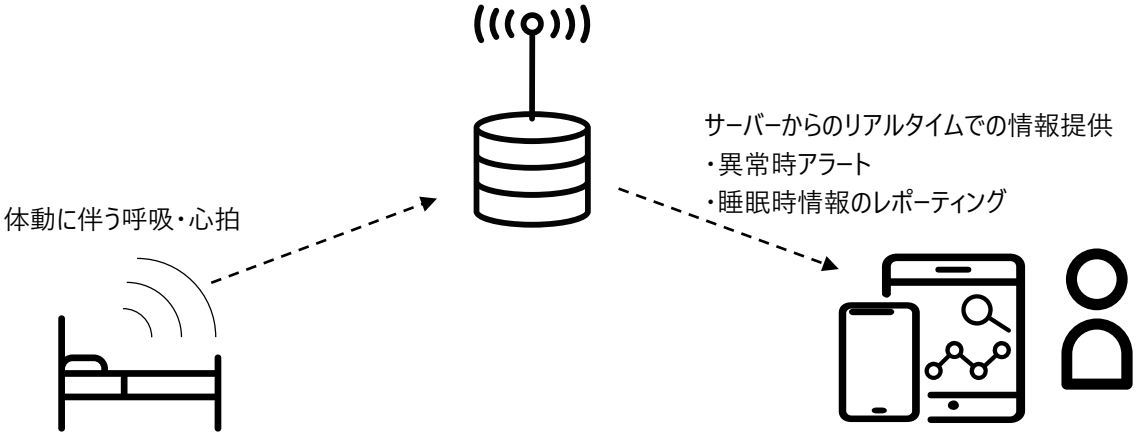
取組内容

マット型午睡センサーを活用した心理的負担の軽減

- ✓ ICTツールを用いた午睡中の児童の体の向きの記録
- ✓ 人の目に加えてセンサーによる体動に伴う心拍・呼吸等の監視による保育士の心理的負担の軽減

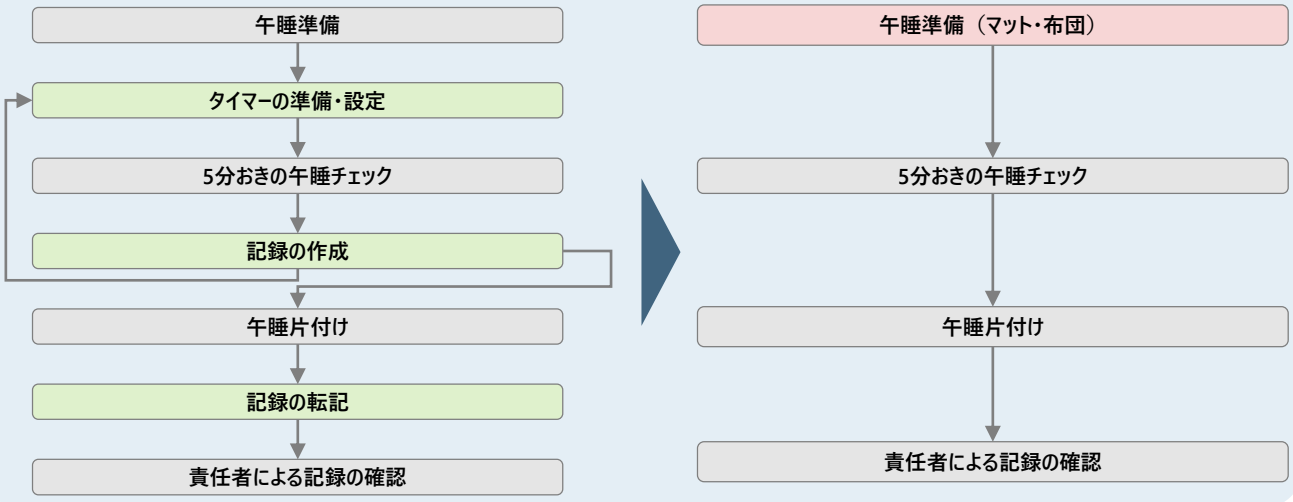
実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	137人（6クラス）
実証参加保育者	31人
園長・副園長	1人
主任保育士等	2人
現場保育士	28人



保育者はアプリ経由で確認できる睡眠時の情報をもとに目視確認や、記録を作成

業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

午睡中の乳幼児突然死症候群などの事故防止への対策が求められていた

- ◆ 午睡中の見守り業務における、保育士の心理的負担が大きかった。
- ◆ 午睡中の事故に対して保護者の不安が高まっていた。

課題解決のプロセス（手順）

マット型午睡センサーを導入し、午睡中の体動に伴う心拍・呼吸等の監視を行えるようにした

1 午睡センサー導入の検討
園長など管理者を中心に、サービスプロバイダーを交えてツール導入を検討する。

2 職員向けの説明
職員向けに午睡センサーの必要性や使い方を説明する。

3 ICTツールの導入
ITリテラシーが比較的高い職員から使用を開始する。

4 ICTツールの利用方法の共有
午睡センサー活用の定着化に向けて、園内でITツールの利用方法を共有する場を設置し、職員のITリテラシー向上を図る。

取組時のポイント・工夫

- 事前に使い勝手が悪いと思われる点や業務負担が増えてしまう点をサービスプロバイダーに伝え、改善を検討してもらった。
- ICTツールの活用が苦手な職員に合わせて導入するようにした。
- 導入初期は、得意な職員が私用するようにして、苦手な職員には使い方を見ているだけでよいと伝えた。
- 職員が参加する「ICT委員会」を開催し、ツールの効果的な使い方や、困りごとの解消方法を紹介した。

質的な成果

- ✓ 人の目では見られない体動に伴う心拍・呼吸等からの異常検知ができることで、保育士の心理的負担が軽減した。
- ✓ 狭い記入欄に手書きで体の向きを記録する手間がなくなり、保育士の業務負担が軽減。
- ✓ 保護者の安心感が高まった。

量的な成果

- ✓ ICTツールを用いた体の向きの記録により欄ずれのミスがなくなった。

取組上の留意点

- ✓ センサーを入れても5分おきの人の目による午睡チェックを怠らないよう、保育士への意識づけを行うことが必要である。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：保護者への説明会の開催
- □ モノ：ICTツールの利用料：2万円/年・光回線（3回線）利用料
  携帯電話回線（7回線程度）利用料・初期費用（タブレット型端末、ノートPC）

事例―06

0～1歳児　2歳児　3～5歳児
園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上
ICT　IoT　その他

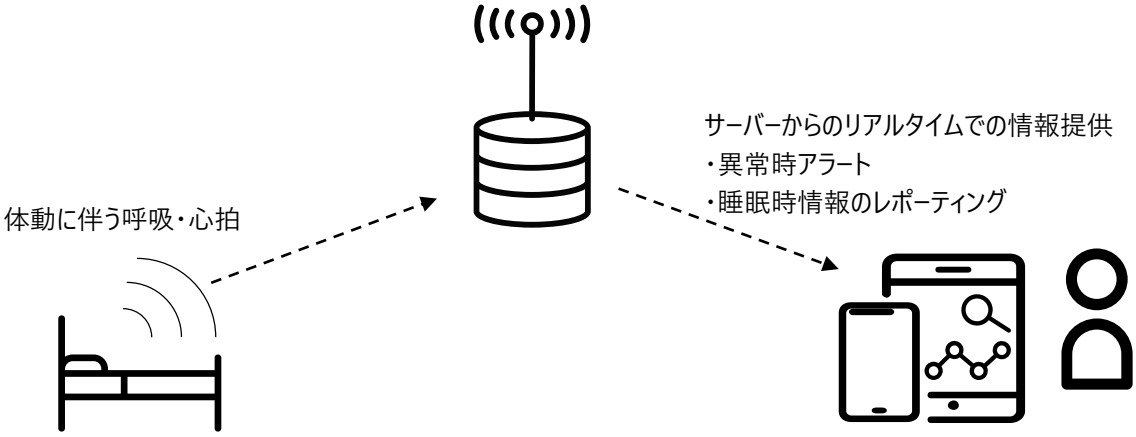
事業所名　株式会社日本保育サービス　アスク大泉学園保育園（東京都練馬区）

取組内容

マット型午睡センサーを活用した午睡チェック業務の負担軽減
- ✓ マット型午睡センサーによる異常時のアラートの発出
- ✓ 人の目に加えてセンサーによる体動に伴う心拍・呼吸等の監視による保育士の心理的負担の軽減

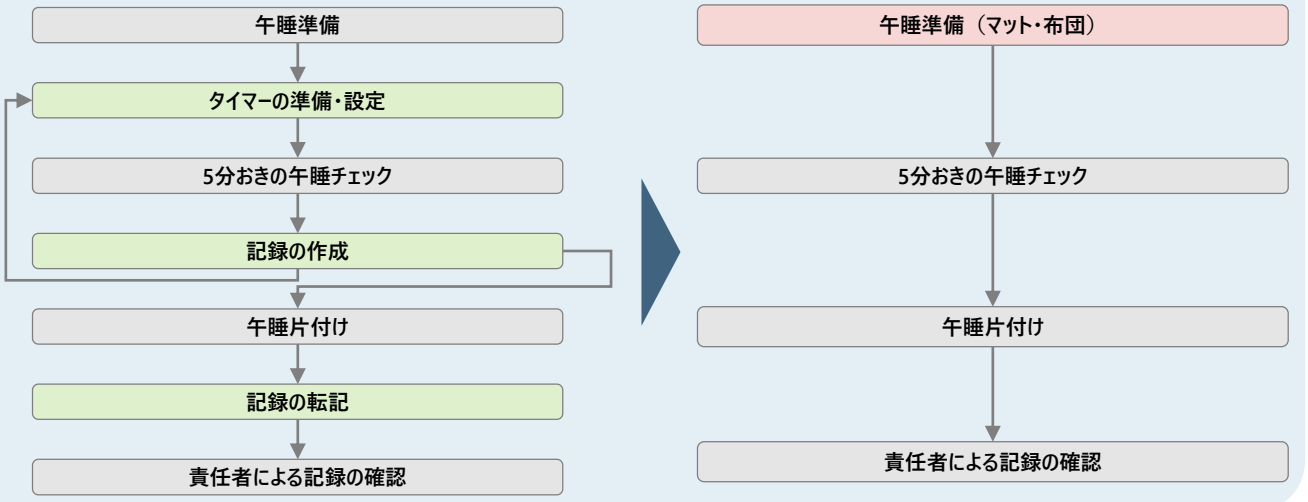
実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	6人
実証参加保育者	3人
園長・副園長	-
主任保育士等	1人
現場保育士	2人



保育者はアプリ経由で確認できる睡眠時の情報をもとに目視確認や、記録を作成

業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

園児の午睡時の乳幼児突然死症候群に対する対策を強化する必要があった

- 園内で事故が発生したことはなかったが、人の目だけでは児童の様子の変化を見逃してしまう恐れがあった。
- 午睡チェックにおける保育士の心理的負担が大きかった。

課題解決のプロセス（手順）

マット型午睡センサーを導入し、人の目に加えてセンサーによる体動に伴う心拍・呼吸等の監視を行い、異常時のアラートの発出ができるようにした。また、ICTツールにより体位を記録できるようにした。

1 導入ツールの検討
保育分野におけるITツールの中で、園内で優先順位の高い分野を検討する。

2 導入ツールの使い方説明
サービスプロバイダーより、オンラインにて使い方の説明を受ける。

3 ツールの導入
5分に1回の人の目によるチェックを維持しつつ、センサーによる見守りを併用する。5分ごとのアラームに合わせて呼吸の有無などをチェックしつつ、異常アラートが鳴ったら子どもの様子を確認する。

取組時のポイント・工夫

- 保育士の業務負担の軽減や保護者の安心感といった観点から、午睡チェックへのツール導入を決定した。
- 導入にあたっては職員間で困りごとや解決策を共有して導入を進めることで、足並みを揃えた導入ができた。
- 人の目による確認を怠らないよう、園長や主任保育士から他の保育士に対して注意喚起を行った。
- ツールの不具合などがあった場合は、サービスプロバイダーに連絡を入れて、適宜修正してもらうようにした。

質的な成果

- ✓ 午睡チェック時の保育士の心理的負担が軽減された。
- ✓ チェックの間の児童の異常にも気づけるようになった。
- ✓ 保護者にとっても午睡中の事故のリスクが軽減されるため安心して預けられるようになった。

量的な成果

- ✓ 手書きによる記録作成では発生していた欄ずれのミスが発生しなくなった。

取組上の留意点

- ✓ 安全側に設定されたアラートが一定数発生することやセンサーの反応領域の限界があるため、ツールを活用しながら人の目での確認も怠らないようにする必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：使い方の講習時間、日々のマットの準備
- □ モノ：午睡マットのサービス利用料

事例―07

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　ウェアラブルIoT　その他

事業所名　ヤクルトキッズスクール須磨保育園（兵庫県神戸市）

取組内容

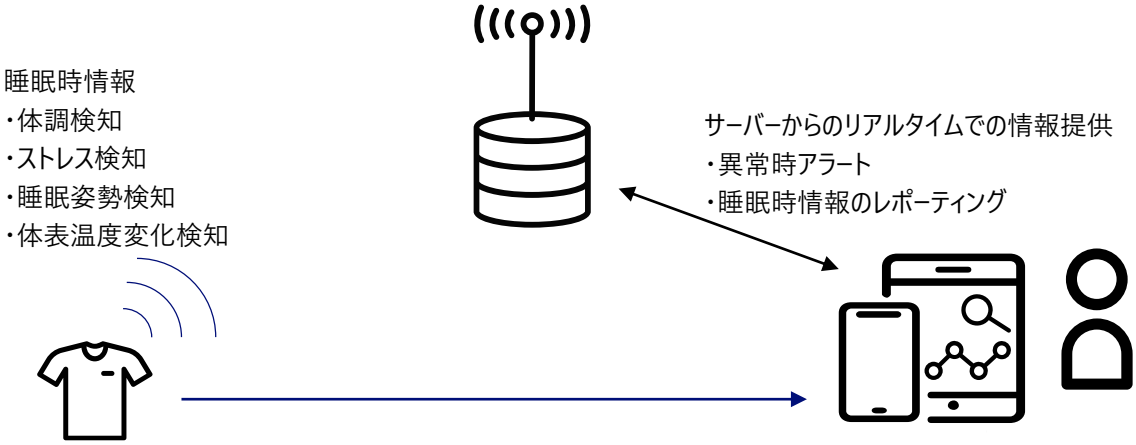
着衣型生体センサーを用いたバイタル・午睡チェック

✓ ウェアラブルIoT（スマートウェア）として搭載された加速度センサーによる午睡時の自動記録

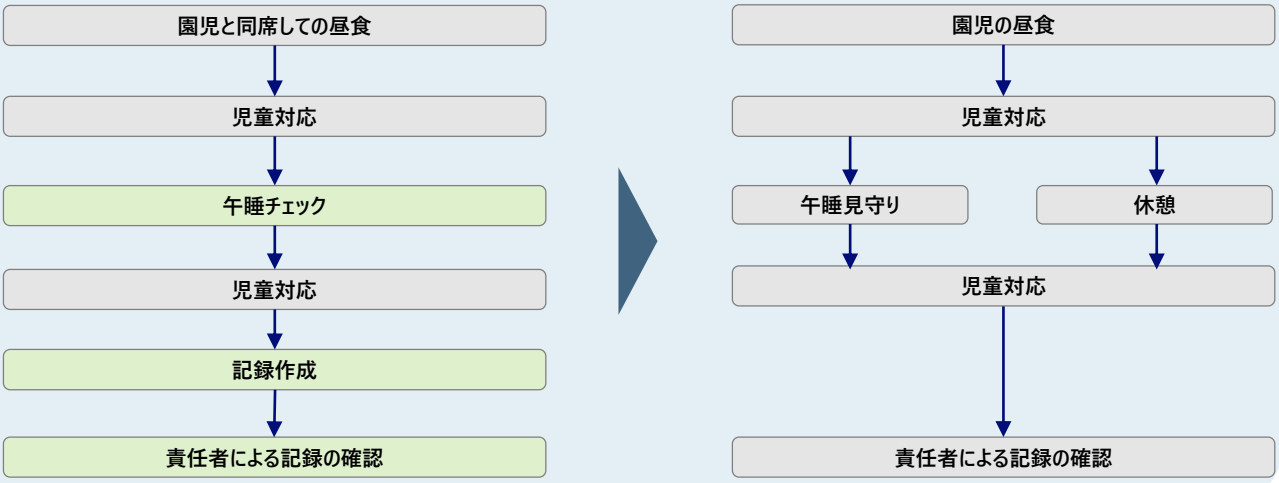
✓ 体温変化のモニタリングによる体調管理の業務負荷の軽減

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	6名
実証参加保育者	3名
園長・副園長	-
主任保育士等	-
現場保育士	3名



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

午睡チェック記録の負荷が大きく、また人の目だけでは児童の様子の変化を見逃す危険性を感じていた

- 手書きで記載する必要のある午睡チェックの記録表の負荷が大きかった
- 人の目のみでの午睡チェックに不安があり、心理的負担が大きかった
- 監査のため紙媒体での記録管理が必要で、その整理・保管といった付随業務の負荷が高かった

課題解決のプロセス（手順）

児童の午睡中の安全確保のため、スマートウェアを用いた児童の体調変化の自動記録・異常検知を導入した。また、ICTツールと連動することで、体の向きや異常の有無が自動記録され、保育士の業務負担軽減につながった。

1 導入ツールの検討
児童の体調変化を検知できるツールを複数から比較検討し、求める機能に合致したものを選択する。

2 保護者へのツール導入に係る説明
保護者に対する、児童の安全確保ツールの機能と使用方法に関する口頭説明、文面を配布する。

3 保育者への導入ツールの説明・理解の深化
現場保育士に対して、導入するICTツールの機能と、その効果を説明する。あわせて、複数の保育者同士で使い方を確認し、誤操作や使用方法の誤りがないようにする。

4 ツールを用いた業務の開始
基本的なツールの使用方法や、児童ごとに微妙にアラーム機能の傾向を把握した上で、午睡チェックなどを実施する。

取組時のポイント・工夫

- 実際にツールを使う先生と複数のサービスプロバイダーの製品を比較した。
- トライアルを行うことで、現場での使い勝手や求める機能の充足度を確かめた。
- 保護者から質問があった際に確実に回答できるよう、使用目的や導入効果を、保護者に説明した。
- 園長・クラス担当の保育者が打ち合わせを重ね、従来運用とツール運用を並行しながら業務の再構築を進めた。
- 実際に使用していく中で、ツールの傾向や、把握できていなかったアラート機能の癖を周囲と共有しながら、より良い使い方を模索した。

質的な成果

- ✓ 5分おきの睡眠姿勢や呼吸確認に加えてセンサーによる体位・呼吸の見守りがあることで心理的負担が軽減される。
- ✓ デジタル監査に対応している自治体であれば、保育園で記録票の管理業務がなくなる。

量的な成果

- ✓ 午睡時の確認作業はなくならないので業務時間に変化はないが、記録管理・検索に要する業務時間はほぼなくなる。

取組上の留意点

- センサーによる午睡チェックを導入しても、保育士の目による確認作業は継続する必要がある。
- 使用開始直後は誤作動やエラーが発生しやすいため、特に人の目での確認を慎重に行う必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：サービスを使いこなせるようになるために約3営業日ほどを要すが、そこまでの負荷はない
  保護者への説明は、ご案内状と口頭での連絡で対応が可能
- モノ：スマートウェア（2,000円/着）、トランスミッター（17,000円/台・耐用年数3年）
  サービス月額利用料（1,800円/人・月）

事例―08

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　**児童の安全確保**　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　**IoT**　その他

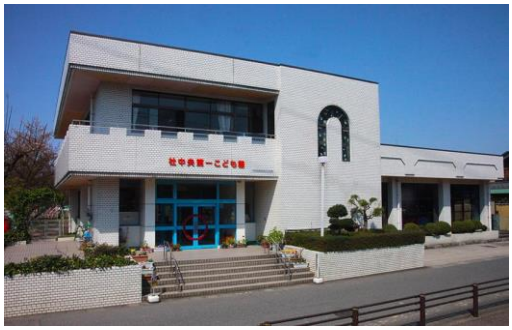
事業所名　社会福祉法人　社中央第一こども園（福井県福井市）

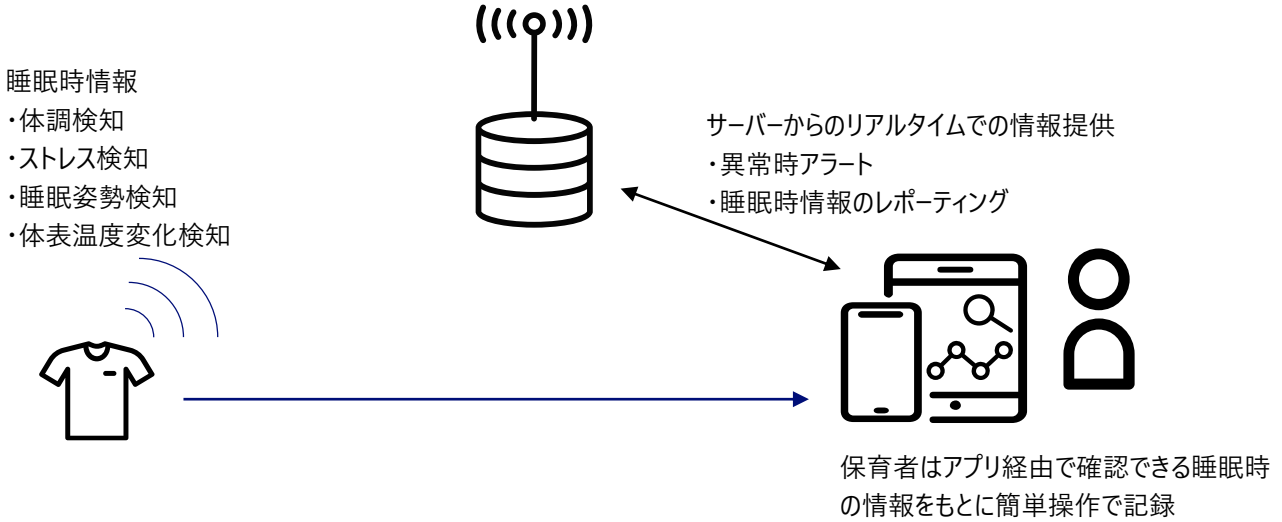
取組内容

IoTツールを活用した児童の安全確保
- ✓ スマートウェアを用いた児童の体調変化の可視化
- ✓ 午睡中の体の向きや呼吸の有無等の自動記録による業務負担軽減

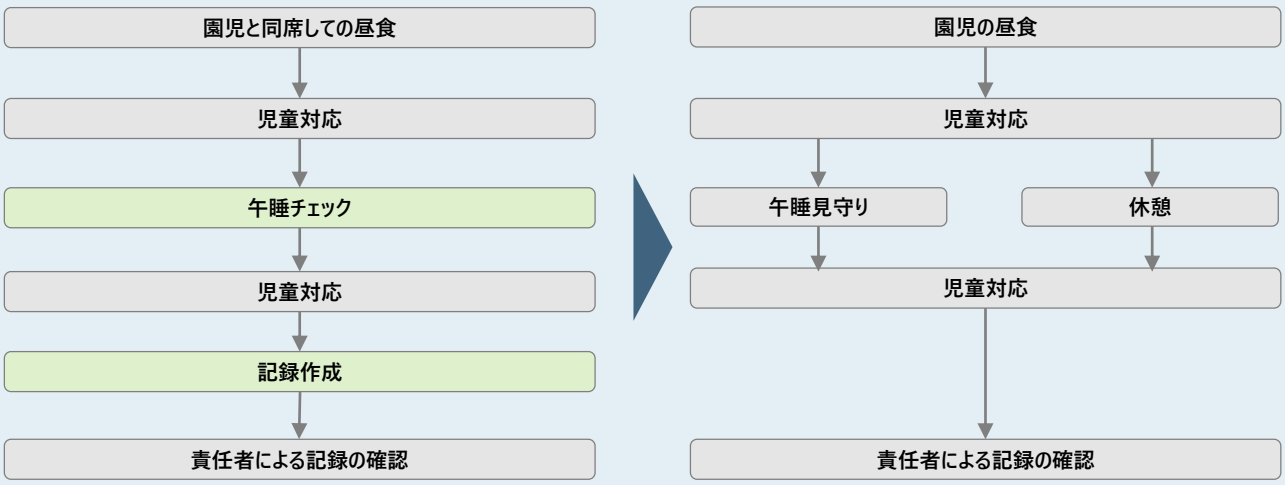
実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	14人（2クラス）
実証参加保育者	10人
園長・副園長	-
主任保育士等	-
現場保育士	10人





業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

午睡中の児童の安全確保のため、体調変化をいち早く察知する必要があった

- ◆ 現場の保育士の目だけでは、児童の体調変化を見逃す可能性があった。
- ◆ 体調変化が起きた際に、その経過を保護者に詳しく説明する必要があった。

課題解決のプロセス（手順）

児童の午睡中の安全確保のため、スマートウェアを用いた児童の体調変化の自動記録・異常検知を導入した。また、ICTツールと連動することで、体の向きや異常の有無が自動記録され、保育士の業務負担軽減につながった。

1 導入ツールの検討
児童の体調変化を検知できるツールを複数から比較検討し、求める機能に合致したものを選択する。

2 保護者への説明体制の確保
スマートウェアが発する電波が子どもの健康に影響が無いことなど、保護者が不安に感じる事項についてサービスプロバイダーに確認を行う。

3 導入の決定
児童の安全性確保や保護者の安心感の醸成を重視して、ツール導入を決定する。

4 導入ツールの説明
現場保育士に対して、導入するICTツールの機能と、その効果を説明する。

取組時のポイント・工夫

- 実際にツールを使用する先生方と共に検討を行い、現場の納得感を醸成した。
- トライアルを行うことで、現場での使い勝手や求める機能の充足度を確かめた。
- 保護者から質問があった際に確実に回答できるよう、安全性の証明文書を準備した。
- トップダウンで園長自ら、ツール導入の意思決定を行うことで、ツールの重要性を示した。
- 保育士に対して使い方を指導するのではなく、保育士同士が教え合える環境を整えた。

質的な成果

- ✓ 保護者に対して体温変化を詳細に説明できるため、保護者の安心感が高まった。
- ✓ これまで先生方の目に止まらなかった体温上昇をいち早く察知し、対処できるようになった。
- ✓ うつ伏せ寝など異常を検知したタイミングでアラームが鳴るため、見守り業務の心理的負担が軽減された。

取組上の留意点

- ✓ スマートウェアの着脱や洗濯といった業務が追加されるため、保育者の業務が増えてしまう恐れがある。現場保育者の方にツールの目的や効果、増える手間を丁寧に説明する必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- □ ヒト：特になし。
- □ モノ：ICTツールのサービス利用料、施設のネットワーク環境、
  トランスミッター+スマートウェア（4枚パック）：約25,000円/名（イニシャルコスト）
  PCやタブレット型端末

事例―09

0～1歳児
2歳児
3～5歳児

園務効率化
児童の安全確保
公衆衛生向上
保育者のスキル向上
ICT
ウェアラブルIoT
その他

事業所名　キムラタン保育園（兵庫県神戸市）

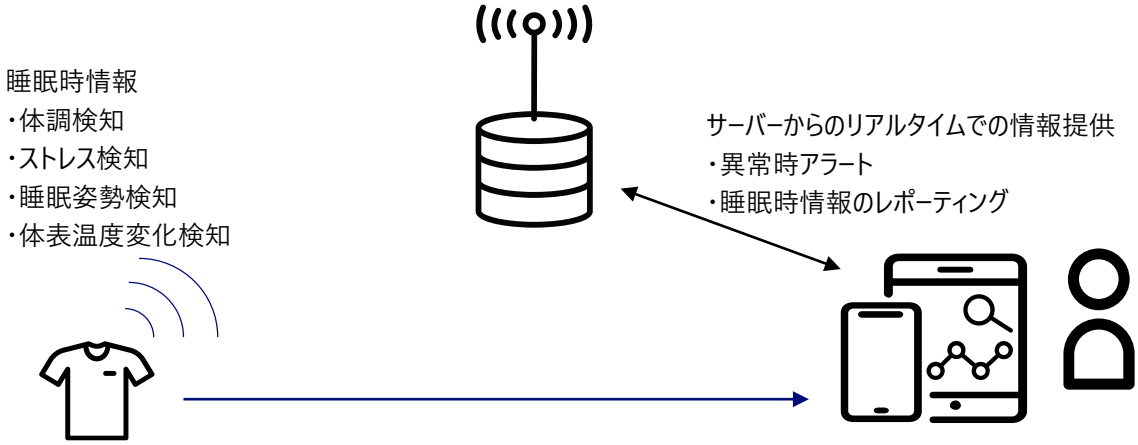
取組内容

着衣型生体センサーを用いたバイタル・午睡チェック

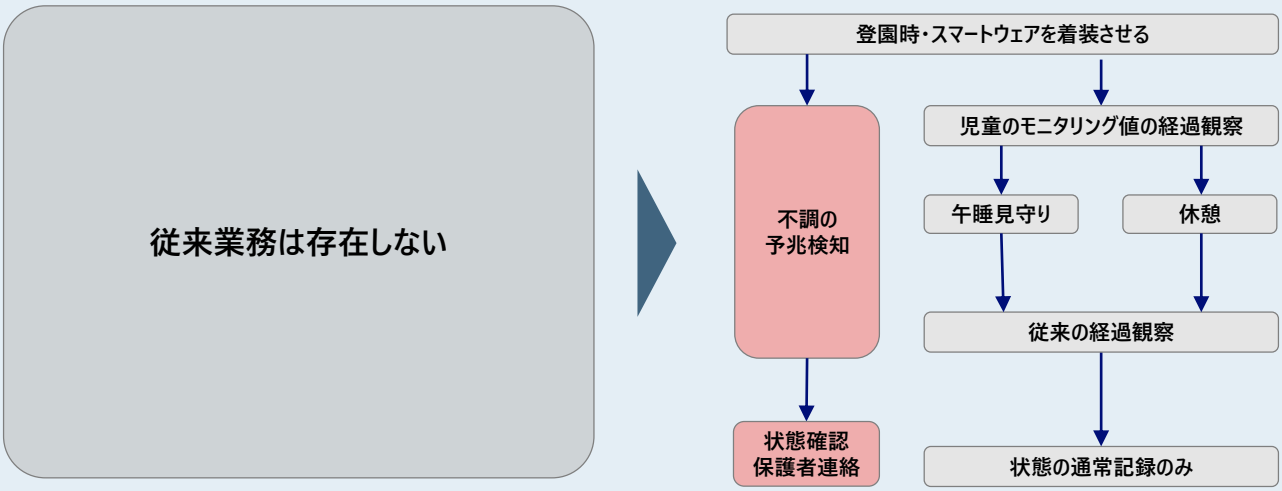
- ✓ ウェアラブルIoT（スマートウェア）として搭載された各種センサーによるバイタル情報・ストレス測定
- ✓ センサーから得られた数値を解析して得られる体調の変調予測結果を受けた予防的経過観察

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	20人（2クラス）
実証参加保育者	10人
園長・副園長	1人
主任保育士等	1人
現場保育士	8人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

スマートウェアからのモニタリング値を用いた実験的な取組

- 保育士が経験的に感じる児童の体調変化をバイタルモニタリングによって可視化できないか
- 体調変化で目が潤んでいる、説明はできないが、様子がおかしいといった体調を崩す予兆検知を説明力を伴う形で証明できないか

課題解決のプロセス（手順）

児童の体調変化の予兆検知を目的に、スマートウェアを導入、ストレスや、熱中症など、目に見えない変化に早期に気づくことで、重症化の予防を目指した。

1 予兆検知サービスの導入について
本事例では、実験的にサービスを導入していただき、児童の予兆変化を想起に把握することのメリットを評価する。

2 保護者へのツール導入の連絡・周知
保護者に対して、スマートウェアを導入する目的や意義を説明し、取組内容の理解を促す。

3 スマートウェアの着装によるバイタルモニタリングの開始
保育者は、児童にスマートウェアを着装させる。トランスミッターから送信されるバイタルデータをタブレット型端末でモニタリングする。

4 体調悪化の予兆検知時の対応
要観察を知らせるアラートを受信した際は、児童の状態を確認し、注意深く経過を観察する。また、明らかな不調が認められる場合は、保護者に連絡をし早急に対処する。

5 アラート内容の検証
ストレスや不調を知らせるアラートが発出された理由について真因分析を行い、今後のフォローに活かす。

取組時のポイント・工夫

- スマートウェアにより体調変化の予兆変化を把握することで、対処できるようになることの詳細を保育者に説明した。
- アラートを受信しても、イベントや遊びでの興奮など体調の不調ではないものも多いことを踏まえながら、対処すべきこと、そうでないものの峻別を保育者で丁寧に試みた。
- 前後での変化を振り返ることで、気分・身体の変化を把握した。

質的な成果

- ✓ 検証点も多いが、予防的な経過観察、早めの睡眠など体調を崩す前にフォローができた。
- ✓ 保護者への情報伝達による、園・家庭間での連携に資する情報提供につながった。
- ✓ 週末のストレスや、のどの渇き（特に熱中症）を検知でき、早急なケアが可能となった。

量的な成果

- ✓ バイタルデータから得られるストレス情報は、児童の興奮状態（節分の鬼やサンタクロースの来園など）でも検出されるが、約1/3の検出値の前後には体調不良や、病欠明けの全快していない状態などが把握できた。

取組上の留意点

- 児童によりツールの反応の仕方が異なる。これは児童側の性格や体質によるものである一方、ツールは機械的に判定しているので、使いこなすためには児童一人ひとりにおいて、ツールがどう反応するのかを、把握しておく必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：サービスを使いこなせるようになるために約3営業日ほどを要すが、そこまでの負荷はない
- モノ：スマートウェアは１着2,000円、トランスミッターが１台17,000円（耐用年数3年）を要する。児童一人あたりの月額利用料は1,800円を要する

事例―10

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人希望の会　こだま保育園（奈良県奈良市）

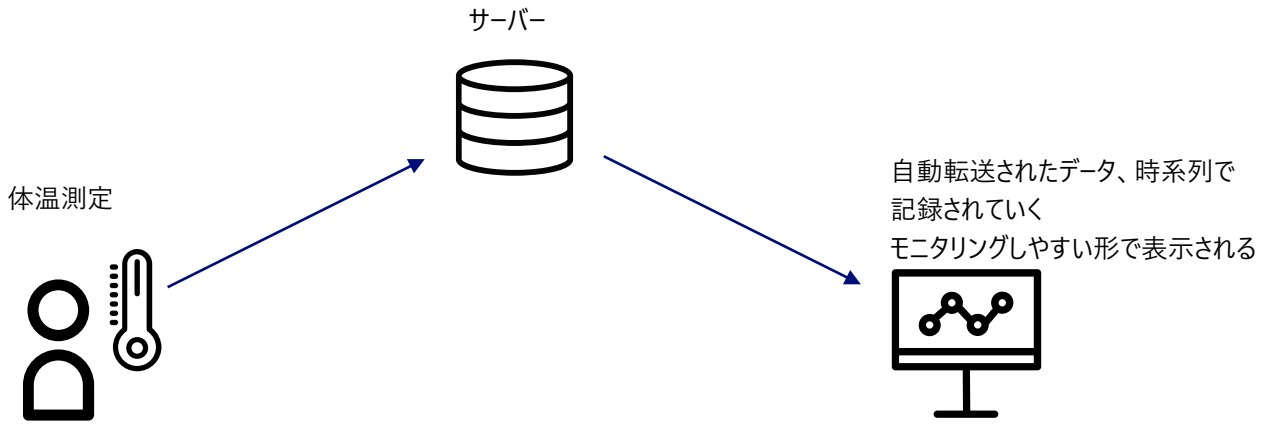
取組内容

スマート体温計を活用した児童の公衆衛生向上

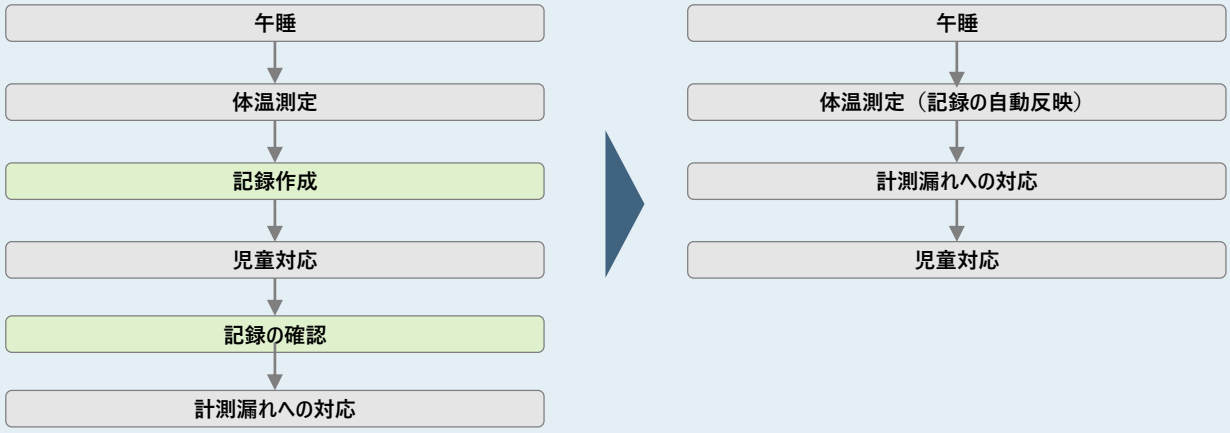
- ✓ 非接触式IoT体温計の活用による体温記録業務の時間短縮
- ✓ ICTツールと連動した体温計測状況のリアルタイムでの確認

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	124人（6クラス）
実証参加保育者	34人
園長・副園長	4人
主幹保育教諭等	-
現場保育者	30人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

計測回数の多い乳児クラスで体温計測に時間をとられ、園児と向き合う時間が確保できていなかった

- 旧式の体温計では一回の計測に時間がかかっており、午睡後にすぐに児童対応を行えていなかった。
- 計測結果を紙に転記する手間・時間がかかり、ノンコンタクトタイムを確保できなかった。

課題解決のプロセス（手順）

体温計測業務の時間短縮のために、非接触式IoT体温計を導入した。さらに、従来から導入していたICTツールと連携することで、計測結果の転記業務を削減した。

1 ツールの選定
園の目的に合わせて導入するICTツールやその機能を選択する。

2 スマート体温計の準備
サービスプロバイダーからツールの提供及び使い方の説明を受ける。

3 スマート体温計の導入
従来の体温測定業務をスマート体温計での測定に置き換えて実施する。

4 スマート体温計の有効活用
職員室から各児童の体温測定状況が一覧で見られることを活かし、計測漏れがあった場合は担任に伝える。

取組時のポイント・工夫

- 既存のICTツールと連携できるツールを選択することで、記録業務の負担軽減につながった。
- 新型コロナウイルス感染症の影響で、体温計測回数が増えていることから、業務負担軽減の必要性が高かったことが導入の後押しとなった。
- 使い方が簡単なスマート体温計を選択したため、初期設定ができれば使い方に困ることはなかった。
- 保護者に届く情報が変更になる点はないため、特に保護者向け説明は行わなかったが、混乱はなかった。
- 計測漏れの指摘で保育者が委縮しないよう、あえてICT機器を使わずに口頭で伝えるようにした。また気づきを促すような伝え方を心掛けていた。

質的な成果

- ✓ 計測漏れの有無を複数の保育者の目で確認できるようになったことで、計測漏れに気付けるようになった。
- ✓ 体温計測時間の削減により、乳児への声掛けやふれあいの時間に充てられるようになった。

量的な成果

- ✓ 手書きで体温を記入する必要がないため、検温にかかる時間が短くなった。

取組上の留意点

- ✓ 計測漏れなどの保育者のミスをリアルタイムで見つけられるようになる一方で、保育者への伝え方には注意が必要。あえて口頭で伝える、責めるような言い方ではなく気づきを促すような伝え方を心掛けるなどの工夫があるとよい。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：特になし。
- モノ：ICTツールのサービス利用料（2,500円/月）・スマート体温計のサービス利用料（5,500円/月）・スマート体温計の端末代金（7,700円/台×17台）

事例―11

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人ユーカリ福祉会　市川保育園（千葉県市川市）

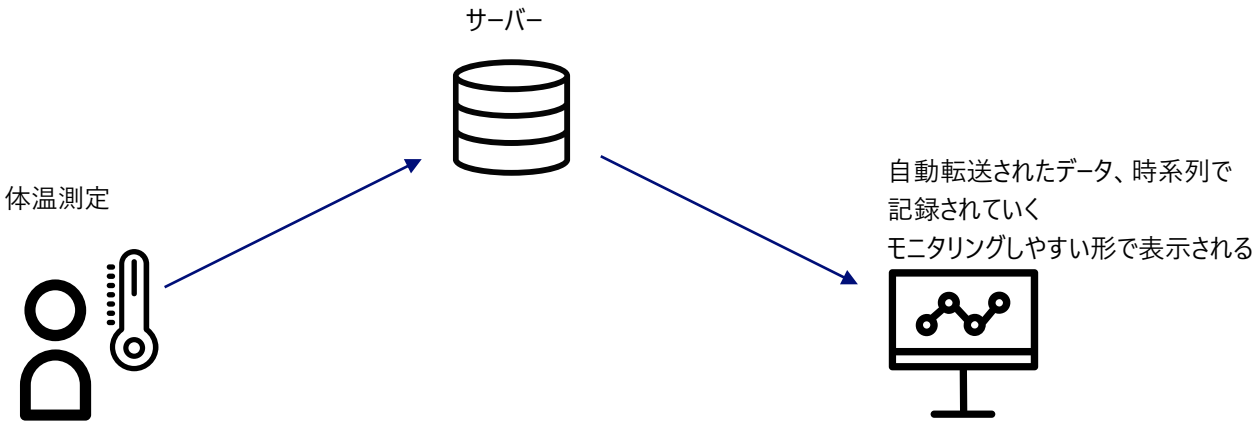
取組内容

スマート体温計を活用した体温測定業務の負担軽減

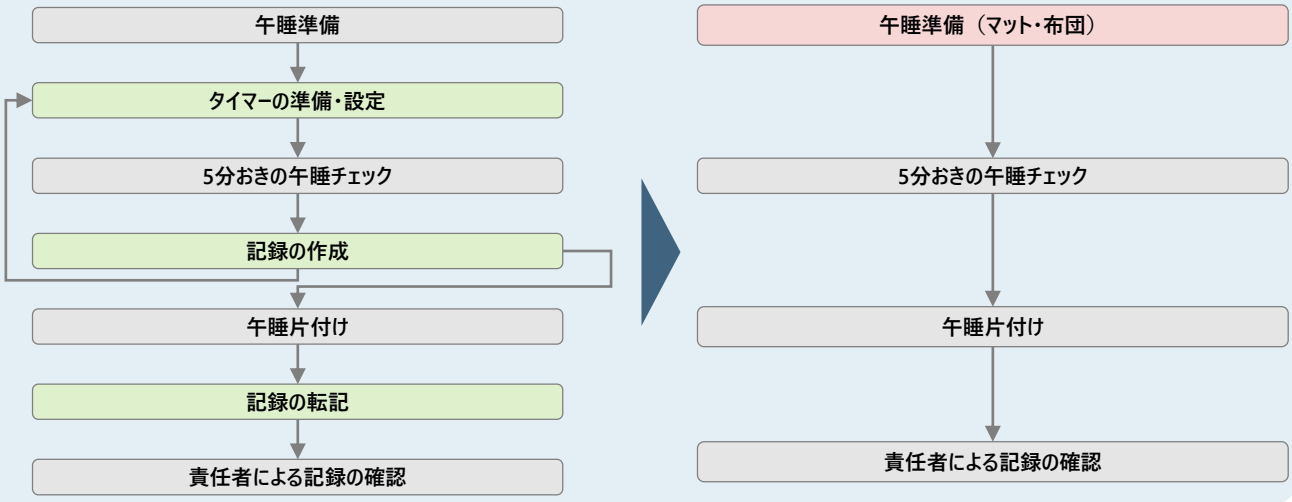
- ✓ 非接触式IoT体温計を用いた児童の体温測定の業務時間削減
- ✓ ICTツールとの連携による自動記録

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	137人（6クラス）
実証参加保育者	31人
園長・副園長	1人
主任保育士等	2人
現場保育士	28人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

保育士不足を背景に、業務負担の高さによる保育士の離職が懸念されていた

- 業務負担を軽減し、働きやすい保育現場をつくる必要性を感じていた。
- 手書き業務が多く、保育士の業務負担が高かった。

課題解決のプロセス（手順）

非接触式IoT体温計を用いて、児童の体温計測業務の時間を削減するとともに、計測結果の自動記録により業務負荷を軽減した。

1 スマート体温計導入の検討
園長など管理者を中心に、サービスプロバイダーを交えてICTツール導入を検討する。

2 職員向けの説明
職員向けにICTツールの必要性や使い方を説明する。

3 ICTツールの導入
ITリテラシーが比較的高い職員から使用を開始する。

4 ICTツールの利用方法の共有
ICTツールの定着化に向けて、園内でICTツールの利用方法を共有する場を設置し、職員のITリテラシー向上を図る。

取組時のポイント・工夫

- ICTツールの活用が苦手な職員に合わせて導入するようにした。
- 導入初期は、得意な職員が私用するようにして、苦手な職員には使い方を見ているだけでよいと伝えた。
- 職員が参加する「ICT委員会」を開催し、ICTツールの効果的な使い方や、困りごとの解消方法を紹介した。

質的な成果

✓ 狭い欄に手書きで計測結果を記録する必要がなくなり、業務負担が軽減された。

量的な成果

✓ 体温計測業務の時間が削減され、児童と向き合う時間や研修などノンコンタクトタイムが増加した。
✓ 手書きで複数の帳票に記録する必要がなくなり、業務時間が削減された。

取組上の留意点

✓ 気温の低い場所に保管された直後に使用すると、うまく動作しないことがあるため、比較的暖かい場所で保管する、冬季は使用前に暖房のついた場所にしばらく置くといった工夫が必要である。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：保護者への説明会の開催
- モノ：ICTツールの利用料：2万円/年・光回線（3回線）利用料
  携帯電話回線（7回線程度）利用料・初期費用（タブレット型端末、ノートPC）

事例―12

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

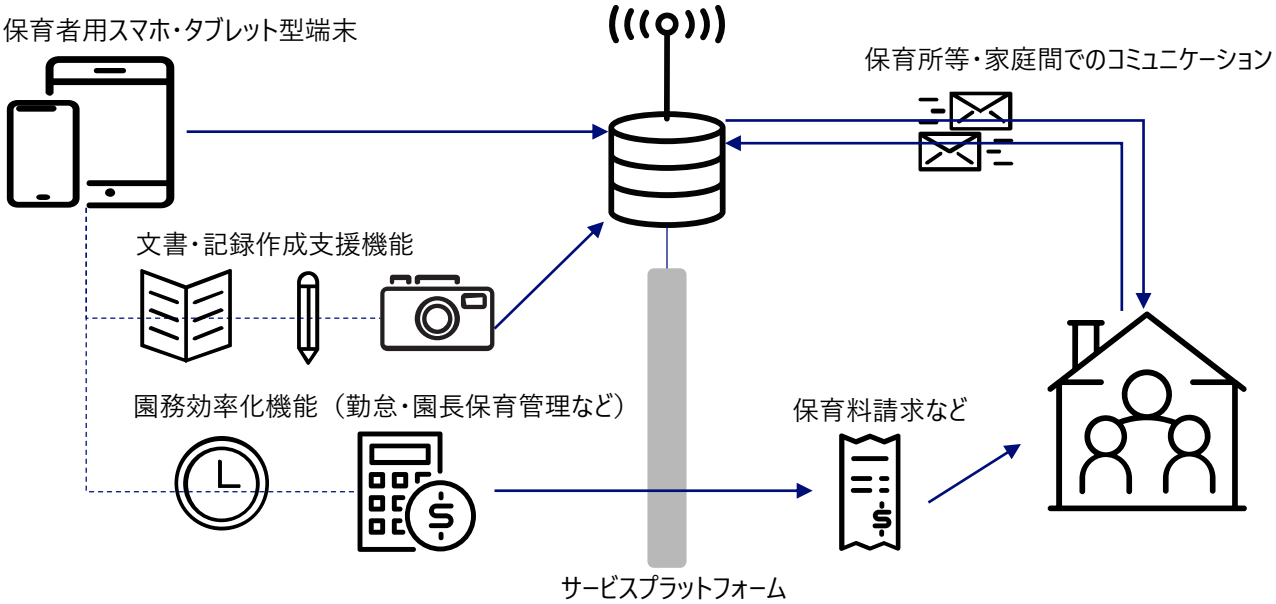
事業所名　社会福祉法人風の森　風の子保育園（千葉県市原市）

取組内容

ICTツールを活用した保育の振り返り研修
- ✓ ICTツールを用いたドキュメンテーション
- ✓ 写真付きドキュメンテーションを用いた園内研修

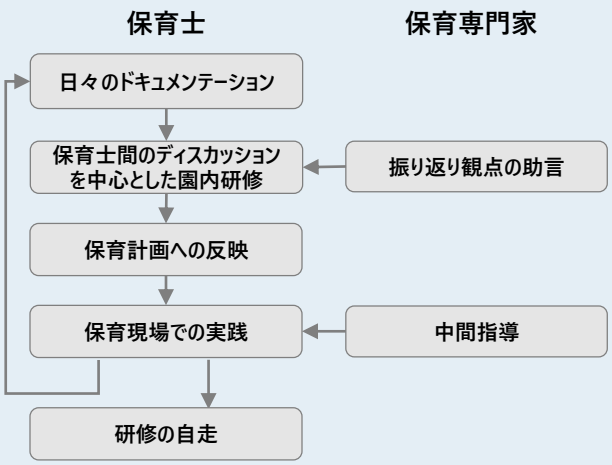
実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	99人（6クラス）
実証参加保育者	14人
園長・副園長	1人
主任保育士等	1人
現場保育士	12人



業務フローの変化

従来はドキュメンテーションを活用した園内研修は行っていなかった



困っていたこと（取組の理由）

保育士間のドキュメンテーションにおける文章力や表現力の差が顕在化していた

- ツール上で作成された記録から、保育士間の観察力・分析力・表現力の均てん化の必要性に気づいた。
- 保護者の保育への理解や参加を促すために、質の高いドキュメンテーションを通して保育園の考え方を正しく伝える必要性があった。

課題解決のプロセス（手順）

保護者向けに配信するドキュメンテーションの内容を研修で活用することにより、研修のための負担を軽減しつつ、効果的な保育の振り返りを行えるようにした。

1 各月の研修テーマの設定
毎月の研修テーマを外部講師と保育園の管理者で決定し、保育士に発表する。

2 日常のドキュメンテーション
発表されたテーマを意識しながら、保護者向けに配信する日々のドキュメンテーションを作成する。

3 研修に用いるドキュメンテーションの選択
各保育士が一ヶ月で作成したドキュメンテーションの中から、その月の研修テーマに合ったものを一つずつ選択する。

4 研修の実施
外部講師を招いた研修を実施し、各保育士が選択したドキュメンテーションを発表・議論する。発表内容を受けて、外部講師から保育の質向上に資するコメントをもらう。

5 日々の保育での活用
研修でコメントのあったポイントを意識した保育やドキュメンテーションを行い、保育の質の向上につなげる。

6 中間指導・相談
月1回の研修の合間にオンライン会議ツールを活用して研修内容の振り返りやドキュメンテーションでの困りごとのについて、外部講師による少人数での相談会を行う。

取組時のポイント・工夫

- 事前に研修テーマを公表することで、テーマを意識した保育や記録を行うようになった。
- 研修用に課題を設定するのではなく、日々の記録から選ぶことで、研修のための労力をかけることなく園内研修を実施できた。
- 記録の選択にあたって園長や主任保育士に相談する保育士も多いが、保育士自身の考えを尊重した。
- 写真付きの記録を活用することで、他の保育士や講師にその時の場面を臨場感をもって共有できるようになった。
- 外部講師を入れることで、園内では気づかない視点を取り入れることができた。

質的な成果

- ✓ 日々の記録において、保育者の意図の伝わるドキュメンテーションを作成できるようになり、保護者の保育への理解・参加が進んだ。
- ✓ 研修を通して、保育士が保育における観察力・分析力・表現力を身に着けることができ、保育の質の均てん化を図ることができた。

量的な成果

- ✓ 研修準備に時間や労力をかけずに園内研修を実施できるようになった。
- ✓ 従来月に1回程度の全体研修が限度だったが、オンライン会議ツールを活用することで、指導の回数を月2回に増加させることができた。

取組上の留意点

- ✓ 研修中に園長・主任保育士や外部講師から課題点を伝える際は、特定の保育士の欠点を指摘しないよう注意する。保育士間の議論を促したり、新たな視点を提示することで、保育士自らの気づきを促すよう工夫する必要がある。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：園内研修の時間（45分/回程度）、外部講師の方の協力
- モノ：ICTツールのサービス利用料

事例―13

0～1歳児　2歳児　3～5歳児

園務効率化　児童の安全確保　公衆衛生向上　保育者のスキル向上

ICT　IoT　その他

事業所名　社会福祉法人風の森　風の子保育園（千葉県市原市）

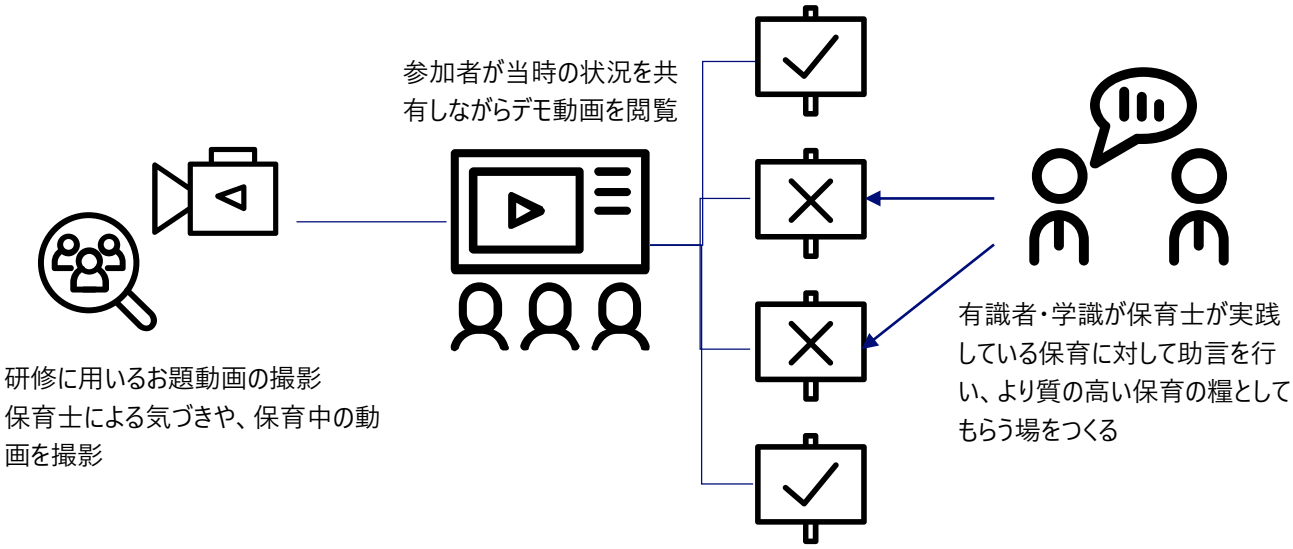
取組内容

タブレット型端末を活用した動画による保育の振り返り研修

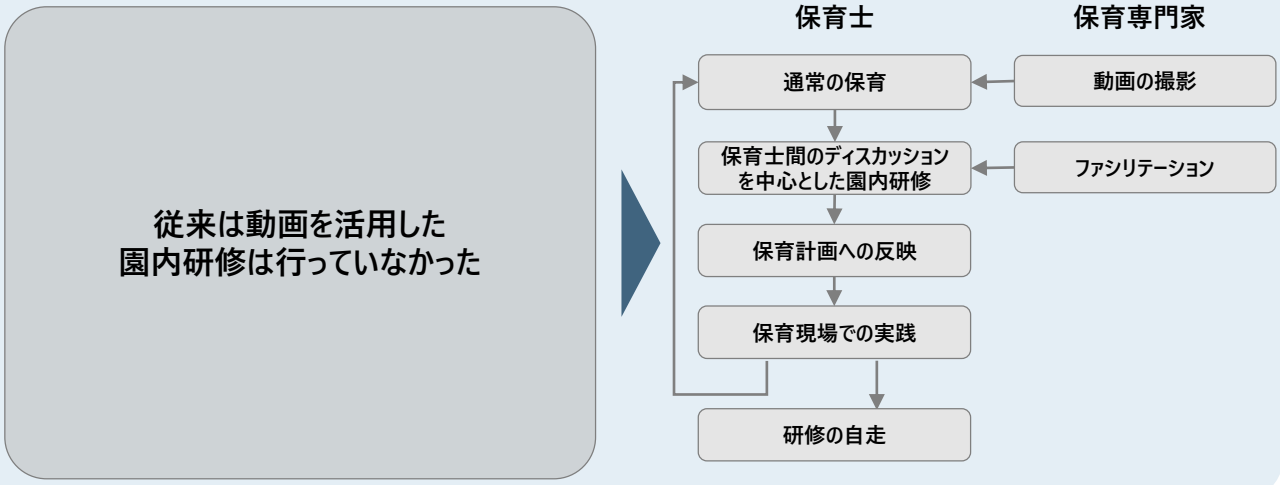
✓ 動画記録を用いて保育中の児童や保育士の様子を振り返る園内研修の実施

実証対象

対象クラスの園児数（クラス数）	99人（6クラス）
実証参加保育者	14人
園長・副園長	1人
主任保育士等	1人
現場保育士	12人



業務フローの変化



困っていたこと（取組の理由）

保育中の児童や保育士の様子を振り返る機会を持てていなかった

- 保育中は児童への対応などに追われ、他の児童の様子や保育士の動きに十分気を払えていなかった。
- エビソードなど文章での記録では、振り返りの際に他者との場面の共有に限界があった。
- 保育士間の議論だけでは、保育士の気づいていない視点での振り返りができなかった。

課題解決のプロセス（手順）

保育中の児童や保育士の様子を外部講師が動画で撮影し、園内研修の場で保育士全員で視聴した。外部講師のファシリテーションで保育中の児童の気づきや保育士の適切な声掛けの在り方を議論することで、日ごろの保育における観察力を磨くことにつながった。

1 外部講師による保育現場の動画撮影
外部講師が保育中の様子をビデオカメラで撮影し、児童の様子やそれを見守る保育士の様子を記録する。

2 研修で使用する場面の抽出
外部講師を中心に、記録した保育中の映像から、気づきのある場面や保育士の声掛けに課題のある場面を抽出する。

3 研修の実施
抽出した映像をモニターに投影しながら、児童が気づきを得た場面や保育士の見守りに課題のある場面の背景を保育士同士で議論する。

4 日常の保育での活用
研修で議論した点や外部講師からコメントのあった点を意識した保育を実践する。

取組時のポイント・工夫

- 外部講師の目線で撮影・場面抽出を行うことで、園内の保育士では気づかない良さや課題を見つけることができた。
- 動画を用いることで、テーマになっている保育の場面を、その場にいなかった保育士も正確に共有することができた。
- 外部講師がファシリテートすることで、立場や年次にかかわらない自由な議論を促すことができた。
- 自園の様子を研修で用いることで、日々の保育での実践イメージを持ちやすかった。

質的な成果

- ✓ 普段の保育では気がつかない児童の反応を動画で客観的に見ることで、保育士の観察力を伸ばすことができた。
- ✓ 保育中の保育士の動きを後から客観的に振り返ることで、よりよい児童への働きかけや保育環境の整備につなげることができた
- ✓ 園長先生や主任保育士の指導力向上につながり、園全体のスキルアップを図ることができた。

取組上の留意点

- ✓ 園長先生や主任保育士の考え方を押し付ける形とならないよう、外部講師を入れる、保育士自らの議論を中心に構成するといった工夫をすることで、普段の保育中には見逃している場面の気づきを促すようにする。

取組に必要な準備（コスト）

- ヒト：園内研修の時間（30分程度）、外部講師の方の協力
- モノ：ビデオカメラ、投影用ディスプレイ